

第二次安倍内閣は5人の女性閣僚を登場させましたがその顔ぶれのほとんどは超「タカ派」です。かつて平塚らいてうは、女性が自分で考えて行動しなくてはならないといい、「男について行く」ようではだめだ、と言いました。「原発容認」「集団的自衛権容認」の安倍路線にぴったりついて行く女性閣僚が増えても、それは女性のねがいに逆行するだけです。戦後「我等の生涯の最良の年」という映画がありましたが、今年はわたしたちにとって「生涯最悪の年」なのでしょうか？

2014年は、なんという年だったでしょう。東日本大震災から3年、まだまだ現地は復興には程遠く、福島原発の廃炉さえ見通しが立っていないのに、政府は早やばやと「原発再開」を打ち出し、辺野古の埋め立ても強行すると言っています。消費税8%の重さが人びとの生活を直撃しているのに、その痛みさえ通じません。昨年12月13日に成立した秘密保護法は、今年中に施行される予定です。

「わが生涯の最悪の年」？
米田佐代子（平塚らいてうの会会长）

それでも「失望しない」精神

らいてうも1950年代の冷戦時代に、どんなに「核実験停止、核兵器廃絶」を訴えても、米ソをはじめとする大国の核実験競争が繰り返されるのを「頭がグラグラする」思いで見つめています。

た。けれども彼女が「わたくしは永久に失望しない」と書いたのは1956年、かつて戦争に反対することさえできなかつた日本の女性たちが、戦後は主権者として平和に逆行する「日本の保守政

党下のこの日本の歩みをだまつて見てはいないうからです。平和憲法のもとで、日本の女性は戦争に対する責任を世界に對して持つてはいる、とらいてうは言いました（庶民のなかに生まれる力）。女性にとって平和とはただ希望するものではなく、自分たちでつくり出す責任がある、というのです。六〇年近く前のこの言葉が、今わたしたちを振り動かしていると思いませんか？



日米安保条約廃棄を訴えたデモ出発前、成城子の自宅で。前列左から山内みなみ、松崎浜子、らいてう 櫛田ふき 1970年6月23日

やまとうらいてうの会ニュース

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

「女性が参加する平和構築」の先見性

ガザやウクライナ、シリア、イラクなど世界各

地ではてしない武力行使のためにおおぜいの女性や子どもたちが殺されている今、らいてうが求めた「いのちを産む性である女性が平和をつくる」という考え方は、国際的潮流になりつつあります。「国連安理会決議1325号」（2000年）

は、「武力紛争解決に女性を参加させるべき」という趣旨で決議されました。「男だけの交渉では『平和』は約束ごとに終わりがちだが女たちは、確実な停戦と、子どもに食べものと住む家、学校と病院を、と具体的な生活再建を求める。これがほんとうの平和構築だ」というのです。それは女性が育児や介護を担っている現実の反映でもありますが、同時にこれまで政治や経済にとつて「周縁」とされてきた子育てや介護・福祉をはじめとする生活の課題を社会の中心課題に据えなおす「政治的枠組みの転換」の主張でもあるのです。

らいてうの「こころざし」の学びなおしを

らいてうは「無謬の人」ではありませんでした。迷い、動搖し、誤った認識を持つたこともあります。でも、彼女は後ろを振り向きませんでした。「行きつくところまで行つてみよう」と自分を励まし、「だれにも頼らず自分の力で」と歩き続けたひとです。

その平和思想を学びなおし、わたしたちも「戦争のない世界」をつくるため、來たるべき2015年へ一歩ずつ歩いて行きましょう。らいてうの会とらいてうの家が、そのためにもっと役立つことをねがつて！。

スウェーデンにエレン・ケイを訪ねる旅

(2014年9月5日～12日)

平塚らいてうの会が呼びかけ富士



国際旅行社で実現した今回の旅は、25人の参加者で期待以上の充実としたものとなりました。それは、企画を行った担当者の皆さん、現地での素晴らしい案内人高見幸子さんに負うところが大きいものでした。また、

関東、長野、

北海道からの参加者の皆さん、家庭、地域で多彩な仕事や研究を積み重ねてこられた方たちで、この皆さんの方もまた旅を豊かなものにしたのでした。



ストランド荘を訪ねる
9月7日、古都ウプサラにウプサラ大学を訪ね、次の一日をかけてバスと一緒にヨーテ運河のクルージングを楽しみながらヴェッテルン湖の湖畔の町モターラに到着、翌日の9月8日いよいよエレン・ケイの記念館ストランド荘に向かいました。バスで2時間半走り到着。あいにく雨模様のお天気でしたが、森の中を湖に向かって進んでいくと、ストランド荘は太陽の光のモチーフの木製の門で私たちを迎えてくれました。かなり急な坂を下つてヴェッテルン湖のすぐのところにストランド荘はありました。入り口には、

エレンケイ財団の理事長で、ストランド荘の館長でもあるヘッダ・ヨーンソンさんが出迎えてくださいました。金髪の豊かな体格の中年の婦人でした。



最初に一階の応接室や台所、食堂など今も使われている部屋を案内していただき、太陽の光を取り入れる工夫のある窓などに感心しながら、二階に上がりました。二階にはゲストハウスとして使ったための部屋がいくつかと、村の子どもたちのための図書コーナーがありました。また、ここを当初からストックホルムで働く職業婦人が休暇を過ごす場所として考えていて、現在も四人が二週間交代で利用しているそうです。湖側の金属製の仮陀のドアたたきのあるドアを開けるとそこは、ヴァエッテルン湖が眼前に広がる息をのむ美しい眺望のテラスになっていました。目の前の景色は異なるものの、らいてうの家のテラスを思い出し、自然への愛が二つの家に共通しているようでした。



書斎の奥は、ケイのベッドと書き物机の置かれ明るい広い部屋になっていました。ケイの最もプライベートなこの部屋で、私たちはケイについてのヘッダさんの話を聞くことができました。それに先立つて折井美耶子さんが要領よくらいてうの紹介をされ、日本から持参した『青鞆』に、らいてうが訳した「恋愛と結婚」のコピーや、らいてうの会の資料などをお渡しました。

ここで、ケイについて語られたいくつかをあげてみると、一つは、父の農業経営が失敗して経済的自立を余儀なくされたとき、ケイは女性の友人と二人で宗教を科目に入れない革新的な学校を作り20年間教師として勤いたこと、当時教師は学校内に住むことが条件づけられていたため結婚が不可能だしたこと、後援者たちからの奨学金によって教師を辞め、1900年に作家として自立、『児童の世紀』は13か国語に翻訳され国外でベストセラーになるなどして収入を得た。執筆活動の期間は、イタリア、イギリス、フランス、ドイツなどに住んだが、60歳になつて幸せだった子ども時代のような家を作り、穏やかに暮らしたいと願い斯特ランド荘を建てた。家の設計や内部の装飾も殆ど自身で行つた。敷地は国から借りていたが財团で買い取り、運営資金も現在に至るまでケイの個人資金による。ケイの親族も当初から現在に至るまで運営に大きく寄与している、などでした。



また、最近の新しいフェミニズム運動の中で、ケイは再評価される動きがあり、ストランド荘も太陽を探り入れ家族を大事にする家として注目されている。ケイについての国際的な研究団体も作られていて日本からも参加をとの呼びかけもありました。

ケイは国際的な友人のネットワークを持つて、アメリカの友人やフランク・ロイド・ライトとともに日本を訪れる計画を持っていたということが、事故によつて実現しませんでしたが、もし実現したららいてうとケイが日本で会つてい

たかもりません。ケイに東洋への共感があつたことを知ることができました。「原始女性は太陽であった」の言葉がうれしいとのヘッダさんの言葉を胸に、ストランド荘を後にしました。

ケイの生家を訪ねる



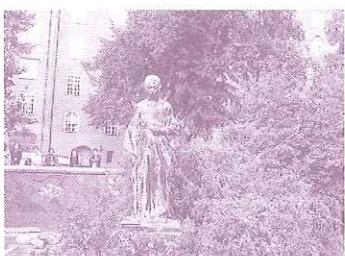
9月9日、モターラか

ら東へ走ること二時間マ
レン湖畔の生家を訪ねま
した。美しい馬たちの育
成牧場の奥に湖に囲まれ

て白い美しい家が建つて
いました。現在の居住者
はお留守のため家の内部
を見るることはできません
でしたが外の見学許可は

いただいていたのでゆつくりと見学することがで
きました。湖で泳ぐための小さな桟橋がありその
わきの彼方には白鳥が一羽泳いでいました。三方
を湖に囲まれた予想をはるかに上回る美しさで、
ケイの気持ちが良く理解できました。

そのあと4時間近くバスに乗つてスットクホル
ムにつき、エレン・ケイの
銅像のある公園に向かいま
した。公園の奥にエレン・
ケイのややうつむいた銅像
が立っていました。花壇の
花に囲まれ足元には池があ
り「エレン・ケイ公園」の
看板もあり、ベンチに憩う
人もいて小さいけれど生き



ている公園でした。

走りに走つてエレン・ケイに近づけた気のする

この旅ですが、高見さんの語るスウェーデンをご
紹介できなかつたのが心残りです。旅行の参加者
の方からのご報告も今後出されることと想いとり
あえずの旅のスケッチです。

(三留 弥生)

7月28日、らいてうの家で
サクソフォンを聴く

真田らいてうの会 塚田 禮子



闘病中の私の願いは、
生の音楽を聴きたいとい
うことでした。外出がで
きるようになり、図らず
とも中川美保さんのサク
ソフォンの演奏の会にさ
そつていただきました。

当日、始めて見た楽器は大きく、きらびやかで、
木管楽器と金管楽器の良さを兼ね備えた楽器であ
ることを知りました。その音色は力強く圧倒的な
存在感を示し、それを奏てる指先は纖細でしなや
かに動き：ふと外に目をやると、木洩れ陽に射す
森が光り、心地よい風が吹き、しきりに啼く鳶と
蝉の声と響くサクソフォンの音が重なり、まるで
音楽や自然に感動する力が残つていた喜びを味わ
い『生かされて良かった』しみじみ思つた一日で
した。

そのあと4時間近くバスに乗つてスットクホル
ムにつき、エレン・ケイの
銅像のある公園に向かいま
した。公園の奥にエレン・
ケイのややうつむいた銅像
が立っていました。花壇の
花に囲まれ足元には池があ
り「エレン・ケイ公園」の
看板もあり、ベンチに憩う
人もいて小さいけれど生き

子ども祭り

あづまや高原にフルートの音響く

8月9日(土) 葦草の森りんどうで、恒例の
「あづまや高原子ども祭り」を実施しました。若
いお母さんや子どもたちに大勢参加してもらおう
と、西アフリカダンスグループ「サブニユマ」の
出演、小中学校の生徒たちが大和田葉子さんのフ
ルート演奏に合わせて演奏する会など、新しい取
り組みを計画しました。しかし残念。大型台風直
撃の情報で子どもたちは大事を取つて参加を見送
つた人も多く、またアフリカの太鼓はぬれると革
が破れる危険ありで、取りやめになるなどアクシ
デントに見舞われました。

それでもしつとりと落
ち着いたフルートの演奏
(お弟子さんも含め4名
の演奏)加えて佐々木さ
ん夫妻の手品のパフォー
マンスもあり、賑やかな
開催となりました。お楽
しみのにらやきせんべ
い、ポップコーンも美味
しく、おむすび、お焼き
も出て、心もお腹も満足の一
日でした。



台風にもめげず大人35名、子ども5名の参加。
天候の影響で子どもたちの参加が少なく残念でした
が、若いお母さんや子どもたちの参加を目指し
たこの取り組みは今後も大事にしていきたいと思
います。皆さん来年も是非ご参加ください。

(若尾 伸子)

日本母親大会2014

特別企画 ビッグつい談

婦人民主クラブ・内田ユリコ

「世界から見たアジアと日本」。語るのは符祝

慧（フー・チュウウエイ）さん、畠田重夫さん、

海南友子さん。コーディネーターは古屋和雄さん。

元NHKアナウンサーの古屋さんが、安倍政

権、日本国憲法、集団的自衛権、天皇明仁、「慰

安婦問題」など、たくみになげかけ、三人が縦横

に語つて会場を沸かせました。

戦争責任から逃げる日本

符さんはシンガポール「聯合早報」紙日本特派員。「日本はほんとにアジアの中にいるのかな?」

と思う。戦争責任から逃げ続け、アジアから見る

のままではまた世界の中で孤独の道を歩き続ける。日本のPKO

（国連平和維持活動）

では、シンガポールの新聞に『日本の自衛隊の掃海艇が来る』と出た。買い物に行つた祖母は、魚屋さんに『自衛隊が来ると、無くなるから、早く買って』と言われ『日本軍がまた来る』と怖がっていた



問題を多角的に学習すること

海南さんは、元NHKディレクター。「戦前、戦中の反省から『国営』から『公共』になつたと最初に習つた。戦争と差別に反対しなくてはジャーナリストではない。職場には小さな圧力は日常的にあつた。番組別に視聴者からの電話の一覧が貼つてある。休まずに作つた番組に反応がないと辛い。はがきでもFAXでも視聴者の反応で番組が変わる。退職してドキュメンタリー映画監督になつた。福島取材中に妊娠を知り、東京から京都に移り、子どもを育てている。原発事故で移住、避難している女性のほとんどが3・11までは社会に無関心。苦しい体験から秘密保護法、集団的自衛権に目が行くようになり、目覚めた女性たちがいろいろな活動をしている」などと語りました。問題を多角的に学習すること、外から日本を見ることがなど改めて教えられました。四人の講演を聞くような分科会で、短く感じられる充実したお話をしました。

国際政治学者の畠田さんは「日本では『終戦』といい『敗戦』していない人がまだいる。A級戦犯たちが政界、財界に居続けた。戦争は、死なない者と儲かる者がやりたがる。今も安倍首相の外遊に経済界が同行している」と怒ります。「学習は行動の源泉」「元気の素」「憲法と戦争体験の話」で日本中を行脚する」「安倍首相をそのままにして死ぬわけにはいかない。頑張ろう!」という畠田さんの九十歳という年齢に感嘆の声が上がりました。

【事務局日誌】

7月1日 会の将来プロジェクト会議
7月5日 らいてう講座Ⅰ「らいてうとエレン・ケイ」講師・折井美耶子副会長（らい

てうの家にて）
7月22日 第3回理事会開催
7月28日 中川美保サクソフォンコンサート（らい

てうの家にて）
8月3日 あずまや高原自治会「消防訓練と懇親会」に参加（於あずまや高原ホテル）
8月6日 らいてう関係資料整理打ち合わせ

8月7日 スウェーデン旅行説明会（於富士国際旅行社）
8月9日 こども祭り（於葉草の森りんどう）

8月14日 会ニュース編集会議
8月22日 スウェーデン社会研究所長・須永さんのお話を聞く会（於富士国際旅行社）

8月25日 8月5日～12日 スウェーデン旅行出発
9月17日 会の将来プロジェクト会議（午前）
9月20日 第1回常任理事会（午後）

らいてう講座Ⅱ「紫式部からのメッセージX」講師・宮島満里子さん（らい

てうの家にて）
9月25日 第5回らいてう資料研究会
計報 真田らいてうの会の半田真紀子さんが6月11日逝去されました。「家」のお当番などで力を發揮していました。ご冥福をお祈り申し上げます。